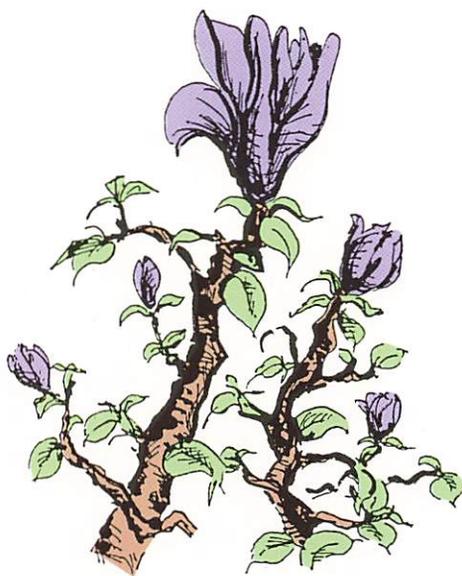


第八回 教文研教育シンポジウム記録

# 外国人の子どもたちとともに

——国際化と学校教育のあり方をめぐって——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・井上シルヴィア

(平塚市日本語指導補助員)

・チアメン・テアツケナー

(厚木市日本語指導講師)

・富山 和夫

(関東学院大学教授)

・原田 淑人

(平塚市立神田小学校教諭)

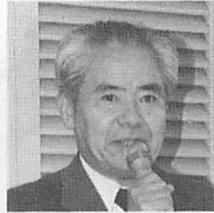
コーディネーター

・宮島 喬

(立教大学教授)

1995年11月18日(土)  
於：平塚市青少年会館

## あいさつ



○稲垣卯太郎県教文研所長 皆さん、こんにちは。所長の稲垣です。

きょうは、私たち県教育文化研究所の主催いたしますシンポジウムに、土曜日の午後、何かとご多用の中をご参加いただきまして、ありがとうございます。また、シンポジストの皆さん、本当にご苦勞さまでです。

中地区教育文化研究所を初め、関係者の皆さんのご尽力によりまして、きょうここにシンポジウムを開くことができました、本当にありがたいと思っています。心からお礼を申し上げます。

本来、今回のシンポジウムは、県の教育文化研究所の特別委員会が一昨年、昨年と調査研究を進めてまいりました在日外国人の児童生徒の教育状況調査のまとめができ上がりましたので、それとあわせましてこの平塚でシンポジウムを開くということを決めました。ところが、申しわけないことに私たち事務局の手違いで校正が大幅におくれまして、いまだに発刊に至るまでになっていません。シンポジストを初め、ご参加の皆さんに本当に申しわけないと思いますけれども、近くでき上がりますので、ぜひご一読をいただきたいと思っています。国際化が進む中で在日外国人の子どもたちの教育問題のためにきょうのシンポジウムが一つの役割を果たすことを期待しておりますし、皆さんのご尽力で実りの多い集会になることを心から願っています、簡単ですが主催者を代表してのあいさつにさせていただきます。よろしくお願いたします。



○加藤良輔中地区教文研所長　こんにちは、中地区教育文化研究所の所長をして  
おります、平塚の春日野中学校の加藤でございます。

まず最初におわびをちょっと申し上げておかなければならないんですが、実は、  
私も中地区教育文化研究所の事業の一つとして教育懇談会というのをやってい  
るんですけども、きょう何カ所かで教育懇談会を同じ時間にやっておりまして、  
本日このシンポジウムの設営のお手伝い、あるいは参加態勢に地域の方々も含め  
まして多少の制約を生まざるを得なかったということで、まことに申しわけなく思っております。冒  
頭にこのことをおわびを申し上げておきたいと思えます。

学校で仕事をしたり、あるいは学校の外でさまざまな教育のことにかかわって、いろんな方からお  
話を承ります。いろいろ課題は多い、その中でその根っこにあるものは一体何なのということをお  
もいろいろ考えるわけですが、子どもたちが人としてのかかわりの中で、みずからの生き方、あるい  
は人生の生き方、そういったものを感じ取りながら、人間として成長していく営み、教育にとって極  
めて大事なそういったものを我々大人がとすれば忘れてきた、そういったこれまでの問題が今子ど  
もたちの間にさまざまな課題として投げかけられているのではないかという思いを強くする昨今でご  
ざいます。

本日のテーマでございます、「外国人の子どもたちとともに」、日本にいる外国人の子どもたちの教  
育、子どもたちが育っていくあり方を今まさに問い直さなければならぬという今日的な課題なの  
もわかりませんが、実は本質的には根っこの中に、子どもたちがどのような状況であろうと、どのよ  
うな子どもたちも人と人との触れ合い、交流、かわりを通して、みずから育っていくという、そ  
の営みを難しくする要因が実はあるんだと。本質的にはすべての子どもたちがかかわる課題なのかと

思います。外国人の子どもたちが日本で生活をし、その中でさまざまな人とのかわりの中のみずから成長していく、そういう状況、条件、環境を私たち大人がどのようにつくり上げていくのか、そのことは大事な課題かと思えます。

中区区の教育文化研究所も、自分たちみずから子どもたちと少しでも心の触れ合いができるようにということで、実はきょうのシンポジストの井上シルヴィア先生にもご協力をいただきながら、国際理解教室というものを昨年からスタートさせました。ポルトガル教室、スペイン教室と限られた講座ではございますが、スタートをさせていただきました。それもそういった教職員の方が、子どもたちをどう理解できるのかという、そのことを試みとしてやってみようという思いからでございます。

本日のシンポジウムが子どもたちの抱える、そういったさまざまな課題を少しでも解決する、私たち大人社会も一歩でも前進していくための大きなきっかけになればと心から思っております。本日被られた時間でございますが、よろしくお願いをいたします。

## シンポジウム



○宮島（コーディネーター） きょうは司会をいたします。私は大学の教師であります。教育文化研究所に、外国人児童、生徒教育状況調査委員会があり、調査をとめてまいりました。調査を始めましてから丸三年たちましたけれども、その間のことは報告をしておりますので、もうここでは省かせていただきまして、早速シンポジウムに入りたいと思います。

最初に、きょうのシンポジストの方々に、自己紹介をお願いいたします。

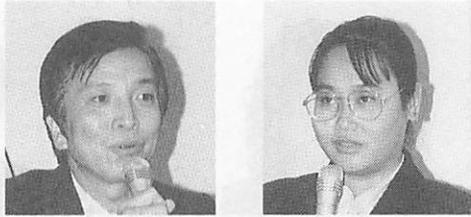
○富山（関東学院大教授） 富山でございます。関東学院大学の経済学部に関係の方を教えてくださいます。外国人の児童生徒の調査では、主にアンケートの自由記述の関連についてのとりまとめを主として担当しております。



○井上（平塚市日本語指導補助員） 井上シルヴィアです。一九五五年にメキシコで生まれ、一九七六年にメキシコの国立大学の科学、エンジニアリングを卒業しました。三年後に日本人と結婚して、一九七九年から日本に来ているんです。

仕事としては、大使館のお手伝いとか、四、五年ぐらい大学のスペイン語の講師をしました。四年ぐらい前から平塚市の教育委員会のお手伝いをしていました。たまたまスペイン語ができますから、ちょっとお手伝いをしています。その後神奈川県警察本部と横浜地方裁判所で通訳をやっています。神奈川県中区教職員組合の国際理解教室でスペイン語を今教えているわけです。たくさん先生方をいろいろな点からお手伝いする仕事もや

つています。



○チアンセン（厚木市日本語指導講師） 初めまして、カンボジア国籍のチアンセン・ティアツケナーです。日本に来てもう十五年ぐらいになります。小学校、中学校、高校と日本の子どもたちと一緒に学んでまいりました。

大学は残念ながら家庭の事情で中退はしましたが、現在、小学校と中学校で外国人児童に日本語を教えています。その他として学校に行けない子どもたちに日本語を教えています。よろしくお願ひします。

○原田（平塚市立神田小教諭） こんにちは、平塚の神田小学校の原田です。

私が最初に赴任した学校は、平塚の崇善小学校で、青少年赤十字（JRC）の活動もしていました。青少年赤十字の中には三つの目標がありまして、「健康安全・スポーツ・国際理解」というのがあります。外国人の人と友だちになろうというので、いろんな手紙を送ったりしていました。それがきっかけになりました。自分の中で海外に目が向いてきて、いつか外国に行ってみたいなと思っていたところ、たまたま日本人学校がありまして、そこへ希望し、レバノンのベイルートの日本人学校に行くことになりました。ちょうど戦争の真っ最中にベイルートに行ったことになりました。半年いまして、日本人が誰もいなくなりまして、クウェートの方に転任になりました。また最後にベイルートに戻ったんです。それからまた日本に一たん戻ってきて三年いたんですが、また行きたいということで再派遣でオランダに行きました。帰ってきましたら、びっくりしたのは自分のクラスに外国籍の子が入ってくる。オランダに行く前にそんなことは全然なかったんですが、たった三年間で自分のクラスにペルーの女の子が入ってきたんですね。これにはびっくりしました。時代が変わったなということ。

ところが、お父さんやお母さんが全然日本語がしゃべれないということで、それがきっかけになりまして、仲間呼びかけまして、今、週一回、この青少年会館の一階でボランティアとして日本語を教えています。そんな形できょうはここに出していただいています。

○宮島 どうもありがとうございました。

ただいまからテーマに入りたいと思いますが、教文研が過去三年間調べたことの要点を、委員でいらっしゃいます富山先生からお話したくという事でお願いします。

○富山 それでは私の方からは教文研の調査結果ということで、時間をちょうだいしておりますので、その点を中心にお話をしたいと思います。



ご承知のように、外国人の児童生徒というのが急増してくるのが、一九八〇年代の半ばごろからだったわけです。もちろんそれ以前にも外国人の方が来ていて、戦後、七〇年代までは中国をはじめ近隣の外国人の人たちで、大部分を占めていました。外国人の方の構成も一九八〇年代から変わってきました。新しく入ってきた外国人の児童、生徒に対しての対応が迫られてきました。特に一九八〇年代の終わりから九〇年代の始めにかけては、急増する外国人の児童生徒への対応のおくれが目立っていた時期であろうかと思えます。そういうことを踏まえて教文研では一九九二年から三年間にわたって、外国人の児童生徒の教育状況調査をおこなってきました。きょうは隣で司会をしてくださっている宮島先生は、こうした問題にいち早く気づいた方でありまして、外国人の増加にともなう色々な問題、児童生徒の教育問題等に長く携わってこられました。この宮島さんの指導で調査はおこなわれました。いろんな調査をしたのでありますが、国際学級といえますか、実際に外国人の児童生徒が指導協力者の方から一生懸命に日本語を学んでいる姿を見る機会もありました。その時の印象は、私どもが当初想像してい

たよりは遙かに良好な環境での日本語の指導がおこなわれていました。しかし、一般的には、指導協力者と児童との数を較べますと、過度な負担になったり、不便をしておられる場合も多い現状にあります。

それからアンケート調査を実施いたしました。対象にしたのは、教育委員会の指導主事の方、クラス担任の方、それに指導協力者の方々であります。調査結果は私共の当初の予想をはるかにこえる回収率を示しました。それ以上にその回答内容が非常に熱心であったことに感謝しております。このアンケート調査の結果は、報告書に詳しく載せてあります。

外国人の児童生徒に対してアンケート調査をすることは、技術的に多くの困難がありましたので、いたしませんでした。その代わりに、四回の座談会を開きました。その中に何人かの児童生徒に出ていただくことになりました。

その結果を報告書にまとめました。それは我々がそのときに考えられた限りでの結果でございますので、きょうシンポジウムの結果また考えておかなければならない、そういうことを感じました。それらもとり入れて完成させたいと思います。報告書では、この問題に関する提言をしておりますので、以下、この提言を中心に我々がどんなことを考えているのかということを紹介させていただきます。たいと思います。

提言は幾つかに分かれております。

### 外国人児童・生徒の教育への提言

本委員会では、県内の学校に学ぶ外国人の児童・生徒、およびその指導にたずさわる人々に対し、



聞き取り、アンケート、座談会等を行い、教育の現状と問題点の認識につとめてきた。それに基づいて、新たな対応や改善が必要と思われる事柄を、以下に「提言」としてまとめた。

提言をまとめるにあたり(1)国籍、民族、母語の違いにかかわらずすべての子どもが等しく教育を受けられ、希望する進学が保障されること、(2)彼ら／彼女らの固有文化が尊重され、希望によりその保持、学習が可能とされること、(3)以上のためにできるだけ充実した指導体制がつけられること、の三点を特に私たちの視点とした。文部省、地方自治体、教育委員会、学校、教職員組合等各方面に、以下の諸提言についての真摯な検討と、それに基づく改革、改善を要望するものである。(在日外国人児童・生徒教育状況調査委員会)

#### 一、指導者と指導体制について

○ 市町村教育委員会は、義務教育年齢の子どもをもつ外国人の転入があった時、就学の機会を逸することのないよう、すみやかに、かつ、できるだけ彼らの理解できる言語で就学案内を配付する。説明しながら手渡すという方法が、もっとも望ましい。

○ 外国人児童・生徒が相当数在籍しているにもかかわらず、国際教室担当教員が加配されていない学校があり、教員の増員を望む声が強い。在籍数にもとづく十分かつ適正な教員配置がなされるべきである。

○ 国際教育では、たんに日本語の習得のための教材ばかりでなく、外国籍の子どもたちが母国について認識や誇りをもてるように、かれらの母国の歴史や文化を積極的にとり上げた読本等準備する。

- 外国人の子どもの指導にたずさわる、専任教員外の指導協力者が各地で重要な役割を果している。教育委員会は、彼ら／彼女らの意見を聴く場を定期的に設け、指導方法等の改善に活かす。
  - 教員と指導協力者のあいだの理解、協力が必ずしも十分ではない例がみられる。各学校内では国際教室担当教員、クラス担任、指導協力者のあいだの相互理解と協力の体制をつくる。
  - 指導協力者のなかには巡回指導で多数の外国人の子どもを受け持ち、過大な負担を担っている者がいる。アンケートによれば「限界は二校六人以内」との声もあり、指導協力者の増員など適切な改善をはかるべきである。
  - 日本語教育の教材は質量とも十分ではない。特に学年が進むにつれ内容も高度化すべきなのに、そうした多様性に乏しく、子どもから「つまらない」という声も聞く。教育委員会は関係者と協力し、読本を含め、多様な教材の開発に努める。
  - 教育委員会は、指導協力者の待遇の改善、および希望する指導協力者への研修の機会の提供に努めるべきである。
- ## 二、子どもの指導について
- 外国人の子どもの在籍するクラスでは、必要に応じ、複数教員の指導制をとり、マン・ツー・マンのきめ細かな指導を行えるようにする。
  - 児童・生徒の「国際化」に対応し、カリキュラムの「国際化」を図り（たとえばアジア史、国際関係重視など）、専任教員についても国籍にこだわらず適切な能力をもった人々を採用すべきである。

- 外国人の子どもへのいじめやからかいが、目につきにくい所で起こっている。教育委員会も、教員もこれを軽視せず、日本人の子どもの国際理解を深め、他文化への尊敬の念を養う。そのため、国際理解の教育をなるべく日本人との共習の場とするのが望ましい。
- 服装や学校内外の行動について校則を画一的に守らせるのではなく、子どもの固有の文化やアイデンティティに基づく行動は可能なかぎり尊重する。全般に、校則をより柔軟なものにすることが必要である。
- 就学援助の諸措置が外国人の子どもの保護者にも適用されることを知らせ、希望により経済的負担を軽減できるようにする。このことを子どもへの指導にたずさわる教員にも周知させる。

### 三、進学について

- 高校進学への希望をもつ外国人生徒が増えている。相違を考慮した平等の理念にもとづき、県立高校には、外国人の推薦入学制度および定員の枠を設ける。学力検査では、(1)日本語力のハンディを軽くするような試験方法をとり、(2)日本人生徒にはないかれら特有の能力（特に語学の力）を評価するため試験科目の代替、追加を行えるようにする。
- 高校進学後日本人生徒と同じカリキュラムの下におかれ、能力を活かせない外国人生徒がいる。高校では、本人の関心、知識、得意な言語を活かせるカリキュラムや、必要に応じて日本語強化の教育を受けられるコースを用意することが望ましい。
- 進学を希望する外国人の生徒で、日本語の能力等の向上が必要な者については、学校または地域の中で補習や日本語特別指導が受けられるようなサポート体制がつけられるのが望ましい。このた

め学校、教組、ボランティア等の協力態勢が望まれる。

- 私立高校、専門学校、大学に進学する外国人子弟で、就学に関わる費用の負担が困難なため学業を中断する者がいる。国または県は、このような外国人の授業料、教材費、実習費等を補助するための基金を設ける必要がある。

#### 四、母語、母文化の尊重と文化の交流

- 国際教室では、児童・生徒の実情や親の希望により、母語の教育も行えるようにする。そのため国際教室の理念、目的、運営方法について広い見地から再検討を行う。
- 母語教育は単に当人の帰国の際の言語適応のためではなく、母文化への接近可能性という文脈のなかに位置づけ、それに相応した教材を準備し、行う。
- 母語教育を行うために、能力、経験をもった人の確保をはかる必要がある。日本人とかがらず、当該外国人の中から人材を得るように努めるべきである。
- 公立学校とインターナショナル・スクールや民族学校の間交流を定期的に行い、国籍、民族を越えた人間同士の相互理解が可能であることを、子どもに体得させる。

#### 五、その他

- 保護者である父母たちがもっと学校参加、社会参加を行えるように、社会教育と連係して父母たちの日本語学習の機会を増やし、多様化する。また、保護者が希望すれば国際教室の日本語指導も



受けられるように、教室を柔軟に運営する。

○ 保護者である父母は共働きである場合が多く、時間帯によっては保護者会に出席することが困難である。日本人保護者にも共働きは増えており、学校は保護者会の日時設定に配慮をする必要がある。

○ 外国人の子どもの就学について保護者に十分な情報を提供し、保護者の相談に総合的に応じられるような体制を、教育委員会が中心になって市、町のレベルで整備する。

○ 宮島 ごく簡潔にまとめていただきました。そこでこれからはほかの先生からの意見も伺いたいと思います、今の報告等も踏まえながら、一番今問題だと感じていることを、三人の先生方に五分間ぐらいでお話をいただきたいと思います。では、井上さんからお願いいたします。

○ 井上 シンポジストとして、名前がちょっと大き過ぎるので、余りそんな目で見ないでください。やつと話ができるようになっていくんですから。

まず私は、四年前から小学校と中学校の外国人の子どもたちを見ているんです。皆さん先生方は日本語の講師だと思っっているんですけども、私から見ると違います。スペイン語の講師なんです。ポルトガル語の講師です。日本語で書いてあるのをできるだけスペイン語で説明したりとか、ポルトガル語で説明したりとか、日本語でどういうふうに習うと、早目に日常の会話になるとか、そんなことを教えています。

四年前と較べると、いい場所になりました。四年前には特別な部屋、教室がなかったんです。ことしの四月から国際教室というのができました。前に私たちは校長室に外国人などで五人とか、六人ぐ



らいでいたり、仕事として大変難しかったです。隣に校長先生が座っていたり、教頭先生が座っていると、非常に緊張する状態で二時間過ごしていたんです。今は部屋が離れましたから、ちよつと気楽になりました。

外国から来ている子どもたちの一番大きな問題はやっぱり言葉ですね。子どもたちの親が、子どもたちのことを考えないでこっちの国に急に引越しているんですね。例えば来月日本に来ますとか。なぜかというとな日本は有名なんですね。八〇%とか、九〇%、大学は卒業できる国ということで世界じゅうで有名なんです。親はそのことを信じ、日本は仕事がたくさんあるからと、子どものことを考えずに日本に来ていっているんです。

ところが、こっちに来ると言葉の問題が本当に大きな壁になるんです。外国から来ている子どもたちの中にはとても勉強が好きで子どももいるし、余り勉強が好きではない子どももいます。力がある子どももいるんです。そのばらばらのグループで、私は、先生として一週間に二回二時間ずつ行きまです。教育委員会がそういうプログラムをつくっているんです。その二時間の中で少なくとも三つの学年の子どもたちを扱っているんです。例えば五年生、四年生、六年生とか、五年生、三年生、六年生とか。ですから、年齢が全然違う子どもたちを扱っているんですけれども、例えば日常の会話の練習をするときとか、平仮名や片仮名の形を覚えているときとか、それは問題はありませんけれども、その学年の教科書を開くと本当に大変です。例えばこっちには二人の四年生がいて、こっちには二人の五年生や、六年生がいたり、こっちはスペイン語で、こっちはポルトガル語ということで、本当にクレイジーな状態になっていることが時々あります。二時間で違う学年の子どもを見ることは大変です。その子どもたちをもう少し理解してもらいたいですね。それぞれの子どもを扱っているんですから本当に大変ですけども、例えば教科書の漢字に振り仮名をふってくれれば本当に助かります。お願

いすると、もちろん「します」と約束してくれるんだけれども、実際は時間がないとかで、そんなにうまくいかないです。

大きな問題として、こっちに勤めにくる外国人は簡単に住所が変わります。ですから、せっかくある程度日常の会話とか、この言葉はどういうふうに覚えれば良いといったことがわかるようになって、子どもが急に明日からこの学校にいませんとか……。だから、私からすれば、もう少し、例えば二年だったら二年とか、三年だったら三年と最初から最後まで、言葉はどうなったとか、勉強はどこまでついていったか、見たいです。

最初の子はどうなったか、いつもわからないです。

○宮島 チアンセンさんはカンボジアの子どもの指導しているわけですが、自分の経験を少し語っていただきたいと思います。

○チアンセン 現在私が教えている子どもたちは、カンボジアの中では難民で来て、子どもと生き別れになっていて、今現在呼び寄せた子どもたちです。その子たちは平仮名も片仮名ももちろん読めないの



で、指導教員が直接に教えています。

こちらで一からやり直しますので、環境も違いますし、親とずっと生き別れで暮らしていたので、その調整も難しい。私みたいに昔からいる者は、もうほとんどカンボジア語ができなくて日本語だけ親はまだカンボジア語だけで話をしている。だんだん会話が通じなくなると、親たちは教育のことに余り関心がなく自分のことで精いっぱいなので、高校を決めるのも、大学を決めるのも自分ひとりで行ってきました。学費はもちろんないので、ボランティアグループに借りたんです。入るまではいいんですけれども、入ってからもまだお金がかかりますので、奨学金を当てにはしていませんけれども、留学生用はあるんですね。あとは日本人用もあるんです。でも、難民というの是对象にないの貸してもらえなくて、大学をやめざるを得なかったんです。

親御さんたちも生活に必死なので、現在、中学、高校で、制服とか教材とかいろいろありますけれども、それが結構重いですね。やっぱり中学を卒業したぐらいで仕事をしてほしいという親の希望が多いです。

日本語だけではなくて、親との連絡をなるべくとるようにはしていますけれども、余り仕事が遅かったりすると、夜にお邪魔するような形になってしまう。そういうことで半分ボランティアです。現在講師をしている時間帯がぎりぎり、平仮名、片仮名を覚えさせるので精いっぱいということで、もうちょっと時間が欲しい。

私自身がそれだけに専念できず、自分の生活もかかっていますので、子どもたちに中途半端なことから教えられない。待遇をもっともって考慮してほしいなと思います。

○宮島 チアンセンさんの場合は、小学校の教室でやっておられるんですか。

○チアンセン そうです。

○宮島 原田先生お願いします。

○原田 一番感じるのは、外国から来た子どもたちは、とにかく言葉のハンディがあるわけですね。そのハンディを（乗り越えるために）私たちは手助けをいろいろしてあげなくてはいけない。その辺が私たちは本当にできているのかな。

例えば皆さんが今外国に行つたとします。お子さんが現地の学校に入ったとしますね。そのときにその子が家に帰ってきたときに、学校でこんなことをしてくれてるんだよ、こんなことをやってくれているんだよと言える状況に今の日本があるかどうか。例えばいきなりカンボジアからやってきた子どもたちがクラスに入ってきたとき、まず平仮名やいろいろ教えると思うんですが、例えば全部黒板にルビを平仮名で振ってあげるかどうか。テストもそうです。

これはB子が言うんですが、「テストなんて、問題がまずわからないのをテストするということ自体がおかしくないですか。」そういうときに、「あつ、問題がわからないんだな」ということがわかるわけですから、問題がわかるように易しく説明してあげるとか、そんなことが果して今の学校でされているでしょうか。

あるいは理科なんかになると問題がさっぱり分からない場合に、例えば「ポルトガル語の辞書を持ち込んでもいいですよ」、そういうのが今どのくらいあるのだろうか。とにかく私たちは体の不自由な子どもたちがいた場合に、車いすの子がいた場合には、それを助けたり、学校の中を改善してきました。まずはそれと同じことを教師がそれぞれどの程度今やっているのかな。行政はもちろんです。そこから辺からちよつと考えてみたいなど。

○宮島 原田先生のお話は、問題が分からないというような問題の出し方で子どもの能力をはかることになるのか。振り仮名ひとつつけてあげれば、それがわかるのではないか。ということですね。

そこで日本の学校の対応であります。日本の学校生活の特徴や問題点についてチアンセンにお聞きしましょう。

○チアンセン 今現在教えている子どもたちのことを考えているんですけども、クラブ活動をして友だちをつくって、部活動もやり始めたんですけども、学校での部活動というのは、土日も試合のために練習していますし、楽しみというよりも、指示もわからないためにきついです。親の理解も余りないので、試合もそんなに毎回は行けない。そのため同じ部活動の子たちからいじめられたり……。二年、三年生でも、一年の子たちと練習したりとか、そういうことですぐやめるような形になってしまふ。私が日本語を教えているだけの時間帯は、本人たちの息が抜ける場所みたいな形になる。授業中は寝ててもいいというか、理科とか、社会も日本の子たちにもわからないような問題なので、本人たちにはもちろん全然理解できないです。先生も一人だけを相手にしているわけではないので、できなくても関係ないというか、しょうがないというか、そういう形になってしまう。隣で、ここはこういうふうに通っているんだよと指示を言えるようになれば、少しはいいんですけども。本人たちができることは体育とか、音楽、図工とか、人まねをしなげることができることだけですね。普通の授業という形ですと、全く入っていけないし、だんだん消極的になっていくんです。

○井上 その辺は私も大きな問題だと思います。中南米の学校は体育は余りしないです。しないというか、体育の先生が選ぶんです。体が大きな子どもは、サッカーとか、バスケットとか。できそうな子どもだけを選べるんです。ほかの子どもたちは応援をします。選ばれた人だけがやるんです。

向こうでは体育で着がえたりは余りしないです。ブラジルの女の子たちは決して短いブルマーに着がえないです。ですから、向こうから来ている子どもたちは、まるでだか外に出るような気持ちになると思います。私だったらやっぱりそうです。

ですけど、チアンセンさんがおっしゃったとおり、体育みたいな授業とか、音楽だとかはまねをしなからできるんですね、言葉に関係なくて。だけど、体育の時間に「きょうは休んだ方がいんじゃないですか」と、先生から言われるんです。もちろん体育の時間は大事ですけども時間がないです。体育が終わってから少し数学とか、国語をポルトガル語とスペイン語で説明したりとかしています。それは学校としては、一緒にやりながらはなかなかうまくいかないものです。向こうから来た子どもたちにとってどっちが大切であるか、ちょっと先生方は少しお話し合いされる必要があるんじゃないかと思います。体を動かすか、こっちの言葉をなるべく覚えるか。もちろん学校に通うことはそれだけではないですね。日常の会話だけではないです。結局教科書のことを理解できているかできていないか。そこが問題ですね。

○宮島 母語のわかる方が授業に出て隣にいろいろな教えるということは多分許されていないんだろうと思いますが、こういう問題とか、井上さんのいわれた、日常会話だけではなくて、教科の日本語までのケアができればと思います。原田先生、学校の側にいらっしゃって、代表者というわけではありませんが、こういう授業の改善は難しいものではないでしょうか。

○原田 今チアンセンさんが言ったことと、シルヴィアさんが行ったことはちょっと反対のところがありましたね。例えば実技指導だと、体育とか、音楽とか、そういうものだと子どもたちが伸び伸びと参加できる。私の子どもたちはシルヴィアさんに教わっていたんですけども、私は、「シルヴィアさん、体育だけは私たちにやらせてください」と言って、体育の時間は行かせなかつたんです。それはなぜかという、一つには、その子にとって体育というのはとても楽しみなものだと思います。学級の子どもたちとの触れ合いの中で一番大事にしたのが、例えば体育とか、家庭科とか、そういうもの。だから、家庭科をやっているときも、授業のときは「シルヴィアさん、授業だからきょうは

お願いします」と言って家庭科の時間に組んだりしたんです。そのかわり調理実習とか、実技が入っているときは、「この時間はやめてください」という形でお願いしていたんです。

中学生になるB子と話をしたときにこんなことがありました。取り出し授業が決まっています。例えば火曜日と金曜日。その時間がたまたま体育にぶつかったんです。だから、ずうっと一学期は体育が受けられなかったんです。そのときの成績が1だったんです。これは本人が悪いわけではないですよ。たまたまその時間が体育にぶつかったにもかかわらず、結局学校がとったというか、その先生がとったんでしょうか、その成績は1をつけた。その子は非常に体育の能力は高いんです。時間割が変わったときに、彼女の体育の成績が5段階の4まで上がったそうなんです。非常にそれを悔しがっていました。だから、受けてもいないのに評価は1がつく今の中学の実態というんでしょうか、その辺の学校の問題があります。

それからこれも一つ問題なんです。さっきから出ているテストの問題です。例えば「補う」という言葉がありますね。「補う」という言葉に振り仮名を振りなさいだったんですね。問題は、漢字が「補う」の「補」のところの下に「う」がありますね。横に括弧がしてありますから、その子は頑張張って「おぎなう」と書いたわけです。「補う」ですから「おぎなう」と書いたんですね。そしたらバツで返ってきたんです。「先生、どうしてこれはバツなんですか」というわけです。私が見たら、「これはみんな合っているよ」、百点なんです。ところが、結局、「補」のところに「おぎな」、「う」はここに書いてあるから、「おぎな」だけを書きなさいということらしいんです。あくまでもこれはテストのやり方ですね。

その先生が、この子は外国籍だということをまず知ってつけたかどうか。しかし、「あつ、外国籍の子どもがこのクラスにはいるな」という認識がまずその先生の頭の中にあつたかどうか、これが一つ

ですね。

もつと言えば、この先生は知っててバツをつけてただ返したとしたら、これは大きな問題だと思えます。この子は一生懸命になってわかenらいのを頑張つてやってきたわけですから、「今回はマルにするけどね、日本のテストのときは、こういうときには、送り仮名がついているときは、隣には『おぎな』だけでいいんだよ」というふうにサゼスチョンしてくればいいわけです。それがなかったので、非常にショックを受けました。その子はそれ以降は、それが痛い記憶になりましたから、「これからは、一切そんな間違いはしていません」と言っていましたから、あるいはその先生は、「そんな配慮をしてくれたのかな」ということもありますけれども。

○宮島 今お話を伺っていて、確かに教科によって体育という時間は外国人の子どもにとつて多分開放の場になっている子どももいるだろうという気もいたします。ただし、今まで伺った子どもたちはみんなサッカーが好きだと言つて入っているようですけれども、必ずしもそうではない。運動が余り好きではない、理科や算数が得意な子もいるわけでありまして、なかなかそこは難しいと思います。



今外国人のお子さんでも滞在の方が三年、四年たつと、高校進学の問題がでてきます。そこで進学の問題についてまずチアンセンさんの場合は、ご自分も日本の学校を終えられた訳ですので、進学のことについて一言お願ひしたいと思います。

○チアンセン 私は小学校からいるので、全く日本人の子と同じように普通にテストを受けて、面接を受けて、それで進学していましたが、今いるある子は、来てまだ一年もたたくて間がないんですけれども、ことしの三月には卒業して進学しなければいけないような状態なんです。日本語を覚えるのがやっとなのに、テストは五教科ですね。だから、できるのは英語と数学の数式ぐらいで、応用問題は全く理解できない。とりあえず問題の意味がわからない。

ずっと学校に行っていれば、何とかテストも受けられるだろうけれども、十六歳、十七歳で日本に来て、高校以上卒業しなければ就職も難しいですし、とても大変です。高校に行きたい子もほかにもいるんですね。そういう子は内申書がないので、どのぐらいで見ていただけのかわからないですし、テストを受けるに当たっても面接で日本語がどのぐらいできたか、そういったことを考慮していただければいいんですけれども、全く学校と同じように理科、社会と出されても、多分ゼロの解答しかないと思うんです。だから、教える側に関しても非常に難しいです。本人たちも本当に受けられるのか、自分は受けさせてもらえるのかということをごく心配しています。

○宮島 レベルを下げてでもともかくどこかの高校に入りたいという気持ちの中三の生徒に我々も座談会でお会いし、非常に身につまされる思いがいたしました。

きょうはフロアにいらっしやいますけれども、高校入試のことについて詳しい黒沢先生に、高校入試について神奈川県をどうしたらいいのか、簡潔にご発言いただけませんか。黒沢先生は、私たちの委員会のメンバーの一人でもあります。

○黒沢 紹介いただきました黒沢でございます。

現在、進学は教育の総和というふうによく言われております。つまり、チアンセンさんもおっしゃいましたけれども、進学を前提としないでただ教育だけやっていても、それは非常に一面的になってしまうのではないかとということで、進学、あるいは進路の保証ということが非常に大事で、その場合には入学試験が非常に大きな問題になってくるわけです。

ところが、皆さんもご存知だと思いますけれども、本県ではルビを振るといふことと、若干の時間の延長といふこと以外には特別な措置をしていないわけです。そのために、かなりの人が希望するところに入っていけない。希望しなくても、とにかく高校へさえも入れないという事態がございます。したがって、私どもとしては希望する人全員が、これは外国人に限らないですけれども、入ってもらいように高校は入試を改めてまいりたい。こういう運動を進めているわけでございます。

できれば、希望する者が全員希望する高校へ入りたいといふことでございます。それには高校間の格差といふものをできるだけなくしていこうということが前提になっているんですが、今、神奈川県ではご承知のようにそういうふうにはなっていないことが大きな問題だろうと思っております。

そして県に聞きましたら、今のところは特にそういうことは考えていないけれども、平成九年度から実施されておる大綱化が実現されていくところで、そのことは考えていくんだということだけは承りました。したがって、今後若干の改良点はあるだろうと思えますが、今のところ特にそれは少し先のことでございます。先ほど富山先生もおっしゃいましたが、やっぱり推薦枠に特別枠を設けて、希望したら簡単な面接程度でとにかく全員入れてしまうということが大事ではないだろうかと思っております。

それから、先ほど原田先生がおっしゃったんですけれども、入学試験でもルビが振ってあっても問

題がよくわからないということなんです。ですから、そこにアシスタントなどを設けることによって、問題自体をまず判つてもらつた上でできないんだつたら、これはやむを得ないだろうと思つて、そういう措置が必要ではないだろうかなということを当面としては考えております。今後どんなに拡大されていく推薦の中に、ぜひ外国人枠というものをとつて、少なくとも入試では余り苦労しないでとにかく入れるようにしたい。入つた後はいろいろ問題はあつてしようけれども。さしあつては今私が申しましたようなことで、希望する外国人はとにかく全員入れてしまうことを目標にしてやつていくべきではないだろうかと思つてます。

○宮島 ありがとうございます。黒沢先生の「入れてしまふ」という、大胆な発言ですが、原田先生、どんなご意見をお持ちでしょうか。

○原田 私の教えたC子が今中学三年です。来年県立の総合高校を今ねらつています。あそこには外国籍の子の枠が十二枠あるんです。これをねらつています。もちろん外国から来た子どもたちも非常に能力に差があるんですが、たまたま私が教えたC子の場合には非常に頑張り屋で、能力の高い子なんです。こういう子が自分の行きたい、そういうところに入れればなど。でも、私たちは何にもしてあげられないんですね。何ができるのかなといつても、日本語教室の中で彼女の勉強のわからないところを見てあげているんですが、そのぐらいしかできない。今言つた行政のそういうところが変わつてこない限り、これはものすごく厚い壁なわけです。たまたま彼女がその時期に日本にやつてきている。将来、彼女が帰つていつかペルーと日本との橋渡しのような仕事につきたいと言っているわけです。よく言えば小さい親善大使になりたい。そんな感じを持っているわけです。そういう子どもたちがいっぱいいると思うんです。だから、そういう子どもたちが日本にいるときにいやな思いをせずに、言葉のハンディによらずとりあえず努力する。何かどこかでしてあげて、入れるようにしてあげられ

ばいいのではないか。だから、教科もさつきから言っているように減らすとか。ものすごく難しいのは社会科学と理科ですね。

中学の試験のときにも「漢字で書きなさい」というのがありますね。歴史なんかの問題で、例えば「聖徳太子」というのを本人はわかっている。だけど、漢字で書けないから「しょうとくたいし」と書いたら、バツになっちゃったというのがあるわけです。そういうこともいろいろ配慮してくれるとか、そこまで日本人と全く同じというのは、これは本当に平等と言えるのかということですね。その辺をぜひ入試の方でも改善してほしいなと強く願っています。

○宮島 富山先生、ご発言お願いしますか。

○富山 私も外国人のために枠をつくってあげるような改革が必要だと思っています。先ほど原田先生からあったことですが、ことしはPR不足で希望者が五人ということで消化していないようです。そういう制度があるということがわかって、これから激戦になると思います。神奈川県では、高校学区が十八ぐらいあるわけですから、それぞれの学区に外国人枠をちゃんとつくって、黒沢先生がおっしゃったように、行きたい人をどんどん収容する。希望する人は原則として入れてしまうぐらいの措置をさせていただきたいと、私も思います。

○宮島 井上さん、いかがですか。指導しておられる生徒などで、高校進学希望を訴えている子どもがいると思いますか。

○井上 さつき原田先生がおっしゃったことですね。もっと勉強したいとか、高校まで行きたいという外国人の子どもたちもいますので、みんなを同じように手伝えることは本当に難しいですね。ですから、さつき話したことで、時間が足りないの、個人塾なんです、土曜日とか、日曜日に四〜五時間練習をしたりしています。

○宮島 外国人の子どもを指導するとは、一体どういうことなのでしょう。原田先生いかがですか。

○原田 日本人の子どもと同じように、機械的にやれるところもあるでしょうし、意欲をもちぜひやらせてくださいという先生もいらつしやると思うんですけども、私は、ぜひやりたい口なんです。何で先生方がせっかくそういういいチャンスを生かそうとしないのか。私たちは「国際理解、国際理解」なんて言いながら、これは言葉だけになっていきますよね。ところが、自分のクラスに、三十何人の中に一人外国人の子が入ってくるというのは十年前は考えられなかったんですよ。これはものすごくいい教育のチャンスですよ。現実には目の前にペルーの子がいるわけです。ブラジルの子がいるわけです。文化が違いますからやるのが違うわけですね。ピアスをしてきたり、指輪をしてきたり、いろんなことが起こります。そういう子が現実に自分のクラスに入ってきたときに、当然いろいろな摩擦が起きます。だけど、その摩擦がいんじやないですか。

結局、そういうことをやる中で摩擦が起きてきて、それでだんだんいい方向にいつていると思うんですね。私はオランダにいたときにびつくりしたのは、実にいろんな国の人がいることでした。日本に帰ってきたときに私が本当にカルチャーショックを受けたのは、成田空港におりたら全部日本人だったことです。それをものすごく異様に感じました。同じ顔をした日本人が同じような格好でゾロゾロ歩いているのを見たときに、本当に正直言って気持ち悪くて震えました。オランダでは、もちろん黒人がいるわ、韓国人がいるわ、アジア人はいるわ、何人がいるわ、いろんな人たちがいるんですね。いろんな人たちが同じ教室で勉強しています。だから、オランダの人にとっては、例えば韓国生まれのオランダ人、トルコ生まれのオランダ人、みんな同じ「オランダ人」というベースで、生まれたところが違うだけなんです。そういう感覚でいるオランダから日本に帰ってきて、全く同じ日本人ばかりを見たときに逆にショックを受けました。

私の教え子の中の一人が「外人、外人」と言っていていじめにあつたわけです。その子を「外人」と言っていてパッと無視するわけですね。その子が悔しがつて泣いてくるんです。なぜかといったら、彼女は日系ブラジル人で、ブラジルにいるときには「日本人、日本人」と言っていていじめられているんです。日本にやってくるまで、今度は「ブラジル人、ブラジル人」「外人、外人」と言っていていじめられるんです。「先生、私は何人なの」。だから、そういう子がいるということをやっぱり感じてあげなくてははいけない。

だから、そういうときにクラスで先生がどういうふうにもその子をとらえてあげているのか。「外人、外人」といじめられているのを見たときに、日本人の小ささとか、狭さとか、そういうものはい機会だから取り上げてパッとやれば、グッと変わってくると思うんですね。全部の子はいじめられていません。私が教えている子どもたちの中にも、「最近どう?」と言うと、みんな「先生、うちの学校はすごくいいんです。先生が黒板に全部ルビを振ってくれます。テストは理科の問題なんかは言葉を全部易しく変えてくれる。友だちもすごく優しい」、そういう子どもたちもいます。だから、結局個々の先生がいかに愛情を持って自分のそういう子たちに接してくれるのか、やっぱりそこだと思っす。

○宮島 チアンセンさん、日本人の子と共に学ぶという点でどんな問題を感じていますか。

○チアンセン とともに学んでいくこともある。日本の子もなれていないから、ちょっと話しかけたいけど、通じないだろうというところもある。本人も自分が外国人だということで特別視されるのが一番いやだし、一番緊張しちゃうというか。だから、自然に溶け込めるようにやっていたら一番いいと思う。例えばカンボジアだったら、カンボジアの文化がどうとか、その子の名前を出すのではなくて、例えば踊りをやっているから自然にみんなを連れて生徒たちに紹介して学ばせたり、そういう授業を見せたりとか、本人の得意にしているようなことを自然に持ち上げるのがよい。

○宮島 特別視される、よくも悪くも特別視されるというのは、問題ですね。国際教室についてですが、実態としては国際教室というのは外国人のお子さんが日本語を学んでいる場なんです。ですから、「国際」と言いながら日本人の子どもはここにはいないわけです。したがって、外国人の子どもと日本人の子どもとの相互理解をどこで進めるか、学校の中ではどんな試みが行われていますか。

○原田 一つうちの学校でやったのが父母、PTAの主催で外国料理の講習会をやりました。ここに住んでいる外国の人たちは、いつも受ける立場ですね。受け身の立場になっていて。やっぱりそれがすごいやなんです。だから、自分の文化を知ってもらいたい。逆にアクティブな動きもしたいわけですね。その辺のニーズがありそうだと思って、ペルーだの、ポリビアだの、ブラジルのお母さんたちに話しかけて、PTAと一緒にになりました。外国料理をつくったところ、満室になりました。

だから、子どもたちとも同じようにやるとよい。国際教室は、外国籍の子どもたちの専用教室になっていますので、そうではなくて各クラスの中で、その子に何ができるか。例えば歌を歌う。カンボジアの歌を歌いなさい



と言って歌えない子もいますよね。好きな子もいる。だから、その子と相談しながら、自分の文化、自分が抱えてきた文化を披露するチャンスとする。その子の性格によりますけれども、そういうふう  
に考えてやるといいかと思えます。みんなでワーッとやってあげると、またいい方向にもなると思う  
んですが。

○宮島 確かに国際教室は、外人の子どもさんが学ぶ所ですね。一般クラスの中に日本人の子どもだ  
けではなくて、外国人の子どもがいることは重要な意味があると思います。学校としては、それを活  
かして国際化の教育をしていたいただきたい。ところで、社会科の教科書を開いていっても、なかなかカ  
ンボジアの人なんかは出てこない。ポリビアの人も出てこない。だけでも、先生方が少し配慮して、  
こうした国にも光を当てていていただきたいと思えます。

今日日本人の子どもとの共生のことについてご意見を伺いまして、ちょっとまだ積み残しという感じ  
もするわけですが、今の学校の中で、例えば社会科では、国際理解の実を上げるようなことはやって  
いらっしゃる先生もいらっしゃると思うんですが。その点いかがでございましょうか。

○原田 六年生の社会科で三学期ぐらいで、世界のことを勉強します。多分ここにいらっしゃる先生  
方も何かいい手だてがないかと考えていられると思うんですね。そういうときに一つどこかの国を調  
べようといっってやりますね。例えば自分のクラスにカンボジアの子がいたら、カンボジアについて調  
べようとか。みんなでもって一生懸命調べていっって発表し合っって、実はカンボジアはこうだったんだ  
と、理解が深まる。会場にいらっしゃる方の方がいっぱい経験されている方がいるんじゃないでしょ  
うか。

○宮島 後でご意見を伺うときに、会場の方にご発言をお願いすることにいたしましたしょう。

それで、質問に入ります前に、もうちょっとパネリストにお話を伺いたい点がございませう。日本語

の講師（正規の教諭としてではなくて）として指導なさっておられる方々が神奈川県でも多いわけですが、チアンセンさん、井上さんもそうであります。そこで、特に指導協力者という立場、そのお仕事の難しさとか、待遇の問題であるとか、お話を伺わせていただきたいんですが。

○チアンセン 現在は週三日で、一日に二時限ということで、一時限に三千円という額面でいただいています。週に六時間だけというのは教えることも限られますし、午前中だけという指定が多いんですね。午前中だけというのと、一時間目に体育が入った場合は二、三時間目、あと三、四時間目とか、そういう中途半端なことになり、ほかの副職もできないし、講師だけをするのでは生活が大変です。

時間外が多いんですね。親御さんとの連絡もそうですけど、夜教えることも多い。学校では本人も友だちと接したりしなければいけないので、そんなに聞きに来ないんですね。だから、家に帰ってから子どもが私の家に集まってきたりとか、テスト勉強とか、そういうことが多いんです。だから、額面上は三千円といっても、月五、六万円で、それだけだと一月やっていけないんです。

○宮島 私も今日初めて伺ったんですけれども、それで昼間にちゃんとした仕事を持ちながらは難しいですね。大変厳しい状況だと思えますね。では、井上さん、いかがですか。

○井上 お給料のことで、本当チアンセン先生がおっしゃったとおりですね。時間は二時限ではないですね。例えば一日二つの学校を回ると、バスを待つ時間とかが多いです。三十分とか、四十分ぐらいのときもあります。だけど、私は給料のことは余りこだわらないです。構わないですけれども、学校の中でちょっと違う問題を持っています。

例えば、普通の日本人の子どもたちはドリルをよく使うんです。それは多分PTAの会費で買うことになっているんですけれども、今、ブラジル人とか、ペルー人の子どもたちは余っているドリルを使っています。国語のドリルとか、算数のドリルですけれども、ところで、わざわざその子どものた

めに買ったドリルではなくて、余っている分ですからばらばらなんです。こっちはこっちの会社、こっちはこっちの会社。ですから、同じ学年の子どもでもドリルが違うんです。余分な仕事が多くなるんです。とてもうまくいかないものですね。

国語のドリルとか、算数のドリルぐらい、例えば学年で四、五人ぐらいの外国人が入ったときは、そのくらいそろえてもらいたいです。教科書がそうなんです。もしかしたら原田先生も多分そういう経験があると思うんですが、大体古い教科書を使っています。それはいいんです。古い教科書でもそろってれば、細かいことはこだわらないですね。日本人の先生の目から見ると、古くても新しくてもどつちでもいいんですね。だけど、私たちは用意しなくてはいけません。例えば一回に二人とか三人に教えるとき同じ教科書でも教科書の新しいのと古いのでは、載っている話がちがうんです。そうなるのと翻訳するのも大変ですが、教えるとき同時に進めることができなときがあるんです。だから教科書は同じものをそろえてほしいですね。

教育はドリルだけではないですが、多分たまたま日本でそういうふうになっているんですね。ドリル教育というのかな、よく練習しなきゃいけないし。

○宮島 チアンセンさんに伺いますけれども、指導の時間というのは週どのくらいで、その子どもたちはどのくらいの期間指導を受けるんですか。

○チアンセン 週に六時間ですね。それ以外の時間、親御さんに説明したり、子どもたちに接する時間帯は全くのボランティアです。それで家庭を持ってちゃんと自立できる人、ボランティア精神でできる人はいいんですけど、やっぱり経済的に大変です。今外国人は社員とか、そういうことでは採ってもらえないところが多いですね。だから、暇を見て教えに行くこともできないんです。保障がないから講師のなり手もないですし、外国人籍の生徒が一人入ったらすぐ講師が見つかるわけでもない

んですね。どんどん断られちゃうんです。

私も、半分ボランティアという気持ちで応じたんですけれども、一年ぐらいという契約なんですけれど、でも、それが終わったら次の仕事がいっ来るかわからないです。社員なんかになるともう一切今後はできないような状態になっちゃいますよね。外国人の子どもたちの外国語ができるということ、そういう指導をしながら、今後はそういう職場につけるような形もあればいいんじゃないかと思うんです。

○宮島 そうすると、来年は続くかどうかかわからないと、そういうことですね。そうになると、やっぱり子どもの指導は一年で終わってしまう、切れてしまう。継続的に接することができない。

○チアンセン そうですね、読み書きができれば、それでおしまいということで、あとは担任の先生に戻すという約束というか。

○宮島 会話ができればとりあえずそこままでやむを得ないということと終わってしまう。実際に教科の日本語の理解はもつともっと深いものですから、大変ですね。

それから、先ほどちょっとと原田先生に伺ったんですが、今実際に外国人のお子さんがある学校に加配が十分に行われていないという部分もあるようですが、原田先生、その辺の実態をお教えいただけますか。

○原田 外国籍の子どもが五人いれば、一人加配の先生がもらえることに一応なっていますが、私の神田小学校は今外国籍は七名います。でも加配はありません。結局申請して、どうしてそうなっているんだというので、教育長さんとこの前話し合ったんですが、聞いてみましたら、申請しても予算が限られているから全部にはいかないうんです。ですから、その辺の問題ですよね。横内小学校とか、横内中学校みたいに外国籍の子どもが三十人とか、何十人というわけですね。そういうとこ

ろでも加配はたった一人ということですが、その辺ももっとも行政の方でも考えていってほしいなという問題ですね。

それから今お二人からお話が出たときに、交通費の点が出ていませんけれども、お二人は交通費は一切出ないんですね。今、Sさんという方が藤沢からここまで教えに来ています。藤沢から電車に乗って平塚の小学校まで行くのに全部自費で来るわけです。やっぱり薄給だと言っています。やり手がないとか、そんないろんな問題がね。

それともう一つは、教育委員会はするんですが、百万円枠つてありますよね。パートだということと頭を抑えちゃっているところがあるようなので、いろいろ解決しなくてはいけない問題じゃないかと思うんですが。

○宮島 指導協力者の方たちは、今本当に外国人のお子さんの教育で底辺を支えている、それから学校からはみ出す部分ですね、つまり、父兄の方のいろんな相談に応じるということも非常によく支えてやっておられるわけで、非常に貴重な存在ですけれども、私なども、今のいわゆる財政難と言われる折に不安定な地位になってきているということを心配しているわけなんです。その点、我々もできるだけはつきり提言をしていきたいと思えます。ありがとうございました。

一応ここで少し皆様方のご発言、あるいはご質問をお受けするというところに切りかえさせていただきますと思います。

質問はそんなに多くございません。今のところ大きく二つに分かれますが、二つ似たような質問がございます、それは日本人の子どもが外国の現地校に編入した場合にどのような特別な扱いを受けるんですか、日本と欧米の先進国の比較ということで少し話していただければという質問があるんです。これはたまたまお二人似たような質問ですね。現地校ではどのような受入れなのでしょうか。

○原田 まず、今海外にたくさん日本人学校があることはご存じですね。日本人学校ができたのは、結局現地の教育が日本の教育と違うから、そこで日本人学校をつくろうという形で日本人学校が全世界にある。私が十何年前に行ったときには三十六しかありませんでしたが、今は何と百何十もあります。最近は変わってきました、アメリカとか、フランス・パリとか、オランダとか、非常に教育レベルが高いところでも日本人学校はできています。それはなぜかと言うと、結局日本に帰ったときの受験戦争に勝ち抜くためですから、日本人学校は全く日本と同じ教育を向こうでするわけです。それを要望するご父兄が非常に多い。こちら辺が一つの日本の大きな問題だと思っています。

たまたま私が行ったオランダは、アムステルダムに日本人学校があるんですけれども、今言ったように教育レベルが非常に高いので、お父さんたちの中には現地の学校にも入れてみようという人がいらっしやいました。ですから、日本人学校がありながら現地の学校に行っている子どもたちがありました。結局その子たちの話を聞きますと、まず日本からボンとやってきたときにオランダの



現地の学校に入りますね。徹底的に、とにかくオランダ語がわからなければ授業が受けられないということ、マンツーマンの集中授業でやってくれるそうです。特別にその子にある先生がついてやってくれる。オランダは本当にすばらしいと思います。オランダというのは子どもに対する教育を非常に大事していますので、そんな子どもに対してもいい意味での特別扱いをやってくださいます。

二点の質問があったから一緒にいいですか。

それから、現地の学校でどんなカリキュラムが用意されているかというので、これは私の娘の例なんですが、向こうにいたときに中学を卒業してアメリカンスクールに高校で入りました。彼女は二年間日本人学校にいて、三年目にアメリカンスクールに入ったんですけれども、すばらしいですね、彼女のためのカリキュラムが組まれます。いろんなカリキュラムがあり、Aのスタイルのカリキュラムがずっとあって、それができる子はそれをやるんでしょうね。ところが、私の娘の場合は特別にまったく別のカリキュラムがある。それを自分がいりいなものの中で選択していくわけです。「私はこれを受けたい、これを受けたい」、ちやうど大学の授業と同じようにいろいろ選択肢があります。「お父さん、どうしようか」と言うので、「おまえはまだ英語が全然わからないんだから、英語のこれとこれを取ろうよ」とか、いろいろ二人で相談して決めましたけれども、それに適用しないときは特別な先生がやってくれます。そういうことが経験としてありました。

○宮島 いま一点は、高校生や大学生、広く一般から外国人の子どもたちの手助けになってもらえるよう、ボランティアなどを募集しているのでしょうか、というご質問です。例えば外国語が話せなくても手伝いたいと思っている日本人は多いと思います。

ご質問された方は、もしここにいらっしゃったら、ご質問の趣旨はどういうことですか。

○—— 広く一般の学生で外国人の子どもたちと交流をしたいとか、そういった方がきつといらつし

やると思うんですけども、どのようにコンタクトをとっていいのかわからないというケースが多いと思います。そういったことを広く一般の方に募集されているのかなと思いましたので、ご質問したんですが。

○宮島 本日フロアにいらっしやる方のお顔を見ていたら、村上さんでしたか、大学院生として、インドシナの子どもたちを教えるサポートをされているグループの方がいらっしやいます。ですから、こちらが答えるよりはむしろ村上さんが一番いいのではないかなと思うんですが。

○村上 ご紹介していただきました村上と申します。

今、相模原市を中心にして、学生、社会人の方を問わず、外国人特にインドシナ難民の子どもたちに対して補習授業、親に対しては日本語を教えるというボランティア活動をしているグループで活動をしております。私自身はベトナム人の子どもにー今高校生ですけれどもー勉強を教える。あとカンボジアのご家族のところ毎週行って日本語を教えるという活動をしております。そのような希望がありましたら、私どもの方へ行ってくだされば一番いいんですけれども、ほかにも神奈川県内いろいろな活動をされているグループがあります。あとは大和の定住促進センターというところがあります。ここはインドシナ難民が日本に来たとき、一番最初に日本語の初等教育を受けるといふことに入るところなんですけれども、そういったところへ問い合わせただければ、お住まいの近くで活動されているボランティアグループを紹介していただけたらと思います。

○井上 もしボランティア希望の方がいらっしやるならば、ちょっとお願いさせていただきます。日本人の方々は外国人と比べると優し過ぎます。心がよすぎます。例えば外国人と出会ったときに、仲よしになりたいとか、仲よくしてあげたいという気持ち都十分皆さんにあると思います。ところが、「一生懸命」という言葉が日本語の中にありますよね。仲よくするときも本当に一生懸命のし過ぎな

んです。ですから、余り最初から一生懸命にやり過ぎては疲れます。そしてつき合いをやめてしまうんです。それが大きな問題なんです。

例えば小学校の中でも、中学校の中でも、最初、外国人の子どもが来ると、本当にみんなお人形さんみたいで、騒いだりとか、仲よくしたりするんですけども、それが三日間とか、一週間たつと、もういいですということになる。ちよつと心が優し過ぎるんですね。ですから、どうぞ皆さん、もしそんな気持ちがあったら、もう少し気を楽にしてください。

○宮島 ありがとうございます。今、ご質問と答えをいただいて、村上さんたちのグループの実践はやつぱり非常に大事だと思えます。外国人のお子さんが高校に進学するときに、学校だけの勉強ではとてもだめで、どこかでそれをサポートしなければいけないんですね。中には塾に通うお子さんまでいるんですけども、それをいろんな形でボランティアの方が教えてあげる、あるいは学校の授業でうまく理解できなかつたところをとかく埋めてあげる、そういうボランティアによるサポート態勢がつくられることが非常に大事だと思うので、今のご質問、並びにお答えを重視していく必要があるだろうと思います。

それから井上さんがおっしゃられるように、日本のボランティアは一生懸命な代わりにどうも偏るところがあるんですね、これがやつぱりよくない。淡淡とした、コンスタントな実践というものができなければいけないと思いますけれども。

○原田 私は先ほどお話ししましたように、湘南JRCというグループをつくって、週一回この青少年会館で日本語の指導をやっています。うちに来ているボランティアは、「湘南新聞」とか、「ホームジャーナル」とかで、時々私たちの教室が取り上げられましたので、そういう情報により来るところがあります。市の社会福祉協議会がすぐそこにありますね、社協の方にボランティアセンターがあり

ます。ボランティアセンターに私たちのグループも入っていますので、そういう問い合わせが最近は非常に多いんです。本当にうれしいことは、高校生とか大学生からチャンスがあつたら日本語をやつてあげたい」とか、「外国人と接する機会がほしいので」という問い合わせがある。ボランティアセンターに問い合わせが来ると私のところに連絡が来て、「先生、こんな子がきょう行くからよろしく」といつて来てくれます。ですから、私たちがやっている日本語教室に、たとえば中学生のボランティアが来てくれて、小学生に勉強を、「はい、二の段の勉強はできたの」などと言って教えています。中学生の子には高校生が一高校生のボランティアが今十人近くいますので一もうすぐ期末があるとか、中間があるという、その勉強を見てやつたりしています。

お母さんが最近ふえてきました。お母さんボランティアが随分来てくれて、お孫さんのめんどうを見るような感じで子どもたちを見たり、それから大人のめんどうも見てくれています。

○宮島 ありがとうございます。まだいろんな問題が残っております。残っておりますが、最後に四名のシンポジストの先生方から、一体今何が重要で、どういうことを提言したいか、こういうことをしてほしい、こういうことを実現してほしい、システムをこう変えてほしいというご意見がそれぞれあると思いますので、順に伺い、シンポジウムのまとめに入っていきたいと思っています。では、富山先生から。

○富山 私はいろんな調査をやつてきて、その中でアンケートのお答えなどでも感じていたんですが、きょうは特に原田先生から取り出し学級をやっていると、取り出されちゃった方の体育なんかには生徒が来ないということになる。出席がよくないから成績も悪くされてしまうことは問題だと思っています。しかし、学校の形で見れば欠席ではなくて、ちゃんと国際学級に生徒は出席しているんですね、たまたま体育の学級には出ていないんですけれども。とすると、学校の中で国際学級の位置づけがち

やんとなっていないと、そういうことが端的にあらわされているのではないかと思うんですね。

ただ、学校のせいばかりではなくて、恐らく文部省も国際学級をどう位置づけているかわからないからこそ、外国人が一定数いれば一人加配をするという原則にもかかわらず、予算がないからだめ、ということになるわけです。

それから、五人を超えたら加配をされているところもあるが、三十人でも一人しか加配されていない。やっぱり行政が国際学級をどういうふう位置づけているかというのがはっきりしていないことが回り回って、なぜ取り出し学級をされている生徒の体育の成績が1になるか、そういうことになるのではないかと思えます。そこらの取り組みをもっとしっかりするように我々も勉強していきたいと思えます。

○井上 私は原田先生と考えはちょっと違います。私が思うことは、外国人の子どもたち、今、例えば小学校とか中学校にいるような子どもたちはもし高校までとか、大学まで行く希望があったら、例えばメキシコとか、ラテンアメリカですと、大体運動をする子どもたちと別になります。運動をする子どもたちは勉強をしなくてもいいんです。大体どの学校でも、サッカーの上手な子どもたちもそのままで。卒業できます。そしていい選手になったりとかすると、学校の顔ということになりますから、運動をする子どもは勉強をしなくていいんです。向こうから来ている子どもたちもそんな考えなんです。

ですから、来たばかり子どもたちとはつきり話し合いをして、学校の方で子どもたちに運動をしなきゃいけないと教えた方がよい。だけど、結構日本では時間が長いですね。部活とか、そういう時間ですね。いつも接しているブラジルの子もたちは、部活をやったら絶対に勉強についていけないです。そのことで学校の方とか、教育委員会とお話し合いをしたことがないですから、どうなのか分か

りませんが、その辺は私もちょっと心配しています。

ともかく高校まで、大学まで行くつもりだったら、部活をしながらの勉強はちょっと無理じゃないかと思いません。

○チアンセン 私の意見のまとめとして申し上げます。一年もたたないのにすぐに日本人の子と同じように試験を受けて、競争に勝てるわけがないので、本人が来たときから、どのぐらい進歩しているか、家庭状況はどうかも調べて、本当に勉強がしたいのかもたずね、場合によっては面接だけで考慮できるところは考慮してもいいんじゃないかと思うんですね。

中学で進学を勧めるときにも家庭環境をよく調べていただいて、お金がない場合もあるし、親たちが本当に希望しているのかどうかという問題もある。本人は行きたいと言っているけど、家の中では親がどういふふうにしつけているのか。そういうことは家庭によって違いますし、国によっても違いますので、調べて考えてほしいなと思います。

○原田 今、一年間におよそ十万人の留学生が日本に来ています。そのほとんどが東南アジアとか中国の人たち



ですね。彼らが来て日本を好きになって帰っていつてくれているかといったら、そうじゃないんですね。というのは、まず下宿に入れないですね。外人といたらだめ。ましてアジア人だと入れてくれないとか、そういうところがいっぱいある。いろんな意味で壁にぶつかっています。

来ているそういう人たちは、結局国を代表して来るような優秀な人たちばかりですね。将来、国をしょって立つ人たちがその中にいっぱいいるわけですね、末は大臣になるような人たちが。そんな人たちが日本で数年間を過ごして、アンチ日本になって帰っていつちゃう。こういう現実が今の日本で起こっていることですね。日本人は長い目で見たときにいかに下手くそか。さっき私が言ったように、成田に降りたら日本人しかいない生活をしているせいなのかと思うんですね。

だから、今こうやってたくさんの子どもたちが来ている。その子どもたちが本当に日本が好きになって、将来国に戻ったときに何の話をするときにも、「日本はいいところだよ、日本はいいところだよ」と言うと、河野外務大臣が行くよりもっと大きな交流になると思うんです。日本を理解してくれる。だから、損得じゃありませんが、今来ている子どもたち一人一人をやっぱり見つけてあげることだと思っんですね。

行政、行政と言ったって、もう行政の方がおこなっていますので、自分に今できることは何かといったら、学級の中で今いる目の前の子どもにも何回声をかけてやろうか、それだと思っんですね。彼が、あるいは彼女が日本を去るときに、「ああ、日本ってよかったな」、さっきシルヴィア先生が優しく過ぎると言いましたけれども、よかったらいいんですよ。「日本人は優しくかったなあ」というのを感じて帰ってくれば、日本好きの子どもたちがふえていくのではないか。私はそう思っいつでもやっています。

○宮島 ありがとうございます。

最後に私の個人的な見解を若干交えながら締めくくりといたしたいと思います。有名な言葉なんです。マックス・フィッシュというスイスの作家が二十年ほど前に書いていました。「我々は労働者を呼んだつもりだった。ところが、やってきたのはヒューマン・ビーイングスだった」。「ヒューマン・ビーイングス」、なんて訳しますかね、「人間そのもの」ということですね。

日本で外国人労働者の受け入れというのが行われました。たとえば日系人の人々を自動車関連の下請け企業で雇用するために呼び寄せる。これはまさに「ウィ・コールド・ワーカーズ」ですね。しかし、実際にやってきたのは人間だった。その人間はそれぞれ人格を持ち、文化も持ち、家族も持ち、子どももいる。そういうトータルな人間がやってきたということですね。

神奈川県にインドシナ難民の子どももいて、やがて日系人がふえてきて、そういう問題が早くから出ておりました。教育界も気がついていました。ですから、指導協力者の雇用も早いんですね。また、先生方の意識も高いですね。ただ、その子どもたちが既に三年、四年、あるいは五年目になる。または幼児期にこちらに来て、幼稚園から入って、ブラジルの生活も、ペルーの生活も知らないという子どもたちもいる。そういうことです。私の言葉で言うと、短期的な対応ではなくて、少なくとも中期的な対応をしなければいけない時期に来ていると思うんです。

そこで、きょうのお話では、最初からチアンセンさんが言っておられたんですが、外国人一人一人みんなバックグラウンドが違うんだという点が一番重要ですね。カンボジアの場合ですと、ポル・ポト政権時代には学校が閉鎖されていますから、カンボジア語の読み書きも十分できないという人たちには「個」に対して、マンツーマンの対応がどこかでできなければいけない。個々の文化背景を知ることとは必要ですね。

二番目に、指導体制の問題は、これは先ほど出たように無視できない問題でもありまして、それは一つ学校に五人以上子どもがいれば、先生を一人つける。加配するというのが言われていながら、加配が行われていない学校がある。また、指導協力者の方ですね、その待遇とか、労働条件の問題とか、それから特に外国人の方がなかなか指導協力者として働きにくいような、そういう現状がある。そのあたりの問題も今回でてきました。

高校入試のことは、黒沢先生のご発言、その他皆さんのご発言がありましたように、日本人にあてがうのと同じ物差しで彼らの進学を可能にしようとしてもどだい無理なことなんです。ただ、無理だから全部そのまま入れてしまうというよりは、もう少しプラス思考をしまして、外国人のお子さんはそれなりにメリットもある、能力もある、だからそれを評価したい。ただ、我々には言葉の壁というものがありますから、なかなか子どもたちの能力がわからないんですね。言葉ができないから算数の文章題が解けない。言葉が解決すれば問題を解く能力を持っているというお子さんもいらつしやるわけです。これはあるバイリンガル教育の専門家が言っていますけれども、英語でもって移民の子の能力をはかってはいけない。英語がよくできる子どもと、英語ができない子どもがいる場合に、英語のできない子どもはあらゆる面で反応は不活発で、問題も解けない。だけでも、かれらは理解しているかもしれないから英語の能力というものによって判定をしないといけない。彼らの母語というものが何であるかをよく注意して調べなさい、と。高校の入試なんかでは、そういう考え方が私は必要ではないかなと思います。

それからカリキュラムのことについては、きょうは井上・原田論争みたいな形になりました。私も聞いていて大変難しいなと思ったんですけども、スポーツのよくできる子を、最初から大学に進学したいという子どもと同じように教育することはメキシコやラテンアメリカではないんだと。これは

きょう伺って、一つの考え方でもあるかなと思います。が、それでいいのかなとも思います。

私は、日本の教育にもよいところがあると思います。どちらかというと日本では一斉授業と申しますか、一斉授業というのが原則である。例えばみんながあらゆることを一斉に勉強することが平等なんだという考え方がありますけれども、それに対して今日は井上さんが一石を投じられたという感じを持つているわけです。ひとつ議論をしていかなければいけないだろうと思います。

最後に、今日は十分に出てきませんでしたけれども、母語の問題があります。今ポルトガル語やスペイン語や、インドシナの三国の言葉をそれぞれしゃべれない子どもが出てきている。しゃべれない子どもたちがこれからどうやって生きていくのかという問題ですね。完全に日本人になりきって、日本語の世界で生きていくことができれば、それは一つの生き方だと思いますけれども、そうはいかないかもしれない。また、それは望ましいかどうかわからない。

母語の問題は中期的な対応の中で考えていかなければいけないのではないかと思います。むしろ理想としては日本語を習得して、しかし、スペイン語の力も、ポルトガル語の力も維持できる。そして両方の言葉を使えるという強みをプラスに転換するような、そういう生き方を何か子どもたちができないものか、そういうことを考えています。母語の問題はそういう角度からこれから考えていく必要があるのではないか。

私は、日系人の子どもに会うたびに「ポルトガル語を忘れないようにしなさいよ」ということをよく言うんですけども、これはやがてはプラスとして生きてくることがあるのではないか、そんなことを思います。

司会者の権限をちょっと乱用いたしましたして、少し個人的な見解を述べ過ぎましたけれども、以上のようなことを私どもは委員会でも考えてきたわけです。今日、シンポジウムでもそれをいろいろ裏づ

けてくれるご意見が出てきたというふうに、手前勝手ではありませんけれども考えております。行き届かぬ司会でしたが、このシンポジウムはこの辺で終らせていただきます。

## 閉会の言葉

○伊藤博彦 県教文研副所長　ご参会の皆さんどうもありがとうございます。また、コーディネーターの宮島先生初めシンポジストの皆さんありがとうございます。ました。



最後に宮島先生がおっしゃられましたけれども、子どもたちのそれぞれの国の文化、それから言葉も含めて、たくさんの子どもたちが今日本に外国から来ていますし、それはあらゆる国から来ているわけですけれども、その子どもたちがそれぞれの教室の中で、自分の国の文化を日本の子どもたちと交流をしながら、それを失うことなく、さらにそこで学習できるような教育環境をぜひ私たちもつくっていきたくと思っていますので、それぞれ皆さん、学校から来られた方もいらつしやいますでしょうし、地域で活躍されている方もいらつしやると思いますけれども、それぞれの場で子どもたちと交流を深めていきたくと思っています。きょうはどうもありがとうございました。

参
加
者
感
想
文

☒ 初めてこのような会に参加しました。外国人の抱える問題（日本に対して）が、こんなにあるとは思いませんでした。将来、我が子も外国へ行くかも知れませんが、日本にきた外国人のように待遇が悪かったら悲しいことです。（シンポジストのお話にあったオランダの外国人に対する対応の例を聞いて）オランダのようにすばらしい日本であつたならと思わずにいられて良かったです。

☒ 平塚市内の小学校に勤務する教師です。今日のシンポジウムに参加させていただいて、たくさんのことを学びました。私自身、外国籍の子を担当した経験ありません。なんらかの理由で日本にやってきた子どもたちも、日本の子どもたちも、ともに幸せに生きていける社会の創造を目指して、学校関係者、教育行政関係者、地域の保護者のそれぞれの立場でもっと考えていく必要性を強く感じました。外国籍の子どもたちが幸せに暮らせない日本は、精神的に貧しい国だと言わざるを得ません。

☒ 現場で指導されている方の意見を聞けて良かったです。（シンポジストの方々）三者三様の立場、考え方があり、面白かったです。

日本の学校では、教員自身が外国人（異文化人）との生活に慣れてない。外国籍の転入生がある  
と、学校サイドが不自然に構えてしまう。

☒ 小学校の教員なので、中学校のこと、高校進学のことなど、あまり目が行かなかつたのですが、今日話を聞いて、こうした現状がいろいろ分かりました。私の学校にも日本語がよく話せない子どもが人数は少ないのですが、次々と入ってきています。その子どもたちの今後のために、今日、話題に

出たことが実現されるといいな、と思いました。

☒ 外国人の子に対する子どもたちの接し方は、大人には信じられないスピードで打ち解けていて、それも低学年ほど言語や知識理解にしても早い時間で習得していくようだ。ただ、問題は、その子を取り巻く大人の偏見的な考え方などが、自然にたかまっていく子どもたちの輪を崩していくように考える。したがって、放課後などの家庭に帰ってからの接し方は親によって止められたり、偏見的知識をうえ付けられたりして、逆にいじめなどの対象になっていくようだ。

また、外国人の親も日本語の習得ができていないため、親との問題解決の話合いが不可能になる場合がある。とにかく、すべての外国人に日本という場で、わだかまりなく過ごせる環境を作ってあげられたらと思います、本日は勉強になりました。

☒ いまのクラスに外国籍の子がいますが、一年のときから入学してきたので他の子とまったく変わりなく生活しています。子どもたちも何の抵抗もなく仲よく遊んでいます。また他の子も外国語なども教えてもらって喜んでいきます。小さいうちに日本の学校に入ってくる子は、すぐに日本語も覚え、問題もなくとけ込んでいると思います。高学年とか、大きくなって転入してくる子が、大変なんだと思いました。とくに進学の問題は深刻だと思います。外国籍の子に対する細かい配慮が必要なのだとこのことを改めて感じました。現在自分のクラスの子の場合は、子どもは問題ないので、親の方が日本語が不自由なため、親へのお便りなど配慮が必要だと思いました。

☒ 今まで自分がやってきたことがそれ程間違った方向ではないことを感じ、彼ら彼女らとコンタクトを取りながらよりよき方向へ持ってゆけるように努力を続けてみようと思います。

たしかに、年齢が高くなるにつれて、いろいろ難しさを増すのがよく分かるような気がします。小・中学校では、日本の子どもでさえ授業について行けなくなる子が多い中、思春期をむかえ、精

神的にも大きな負担を抱えていると思います。何か自信につながるように、生きていくうえで支えとなるものをつかむチャンスづくりを積極的に行なっていくかと思っております。

☒ 高校入試についての提言の中で、外国人枠を設けるということは、ぜひ進めて実現できると良いと感じました。学校の中で国際教育、国際教室のあり方はまだまだ遅れているのだと今日の話しの中で痛感しました。

☒ ルビをふる、テスト等への配慮など、日常生かせる細かい点も参考になりました。毎日一人の先生で受け持つ小学校とは違って、中学校では何人もの教師でみていると、どうしても配慮に欠ける面が出てしまい、外国から日本へやってきている生徒の心を傷付けていることもあるのだということが分かりました。ただ、担当しているものの、愛情や配慮だけではカバー仕切れない部分も多いようで、ぜひとも、行政への働きかけをお願いします。(これは組合へのお願いになるのでしょいか?) 取り出し学級で保健体育が1というのは、まずいと思いますが、受けていない事業を評価できないということになったというのではないのでしょうか? でもこういうケースは、もう少し担当の教師で話合いの場を設けないといけないですね。

☒ 進学等について、外国籍の子どもは日本語のできない子どもという前提があったように思う。中国・韓国籍の子どもを始め、日本語の方が上手な子供の方が多数派だと思うが、彼らの外国籍ゆえの金銭的事情などへの配慮も必要では? チアンセンさんの話にも奨学金がもらえなかったとあるが……。また無条件に希望者全員を入学させる制度の普及とあつたが、恒常的に学業を習得するためには高度な日本語が必要というんで必ずしも適切であるとは思えない。もちろん日本語未習熟者への配慮は不可欠であるが……。そうしたところから余剰人員(教員の採用を適正にすれば充分余剰であると思う)を活用して日本語習得をどのような段階でも充分にできるようにすべきだと

思う。

☒ 厚木市は、チアンセンさんのような日本語指導講師を月給制で雇用すべきだと思います。国際理解教育など美名のもとで口は出すけど金を出さないという日本文部行政、県行政、市行政の実態が出ていて残念です。今私の勤めている学校には、結婚等によって日本で学ぶ子どもたちが七百人中二十人ぐらいいいます。日本の学校に母子で適応できず情緒不安定な子もいます。いろいろなケースで対応できよう、行政への働きかけも必要です。これからは、ますます地球上で人々が交流していくと思います。わたしはアジアの人々との交流に期待しています。不幸な歴史はきちんと学習して、明るい展望を持ちたいと思います。

☒ 現在5ヶ国の国籍の児童と接している学校です。保護者の多くは、ひらがなを読める状態です。しかし、家庭内のお母さんは、母国語でなければ細かい心情を理解できないためTVを見ても何を子どもが笑っているのか分からずコミュニケーションがとりにくい児童もいます。そこで私自ら公民館のボランティア活動に入り、大人の日本語理解に努め始めました。子どもへの思いや主人との言葉のギャップなど様々なストレスを持つ人たちが少しずつ明るく自信を持って口を開くようになりました。今回はさらに具体的な例に触れまして、学校、地域での活動方針が見えた思います。現在言葉が分からなくて勉強をしなくせを付けた児童は、話せるようになってもなかなか(勉強に)取りかかれないのが悩みです。

外国の方は、日本の方よりたくましさ熱心さがあり見習いたいものと感じました。

☒ 在日の中国韓国の子は、母国語の会話・文字についてはどうなのか？

母国語を失わせないように(話せるけど書けない)母国を大切にしよう日本文化も母国の文化も共に共有できるようにしてあげたい。

日本人教師も彼らの文化を知ろうとする（言語面でも）努力をかけているかもしれない。教委もそのことについては、不十分。

彼らこそ国際人となりうると思っています。私の学校にもペルー、ブラジル等から来ている子どもがいます。外国から来ている子どもそれぞれ個性が有、違います。「ペルー人は……」「ブラジル人は……」と一まとめに言う間違いをおこす日本人教師がいることは、反省すべき。

☒ 教育行政上の問題（改善すべき点）が多く取り上げられたと思います。教育現場でできることを掘り下げて話させたらよかったと思います。今日、学べたことは、すべての（日本人、外国人）子どもに平等でなければならぬこととは何かということです。四十人学級（外国人を含む）であれば、四十通りの支援を考慮して教育することだと考えます。「不平等な教育で平等に愛する」ということの大切さを学びました。

☒ 現状報告に終わってしまい、学校教育のあり方まで話しが及ばなかったのは残念です。今回初めてこの問題に取り組む人には良いでしょうがもっと突っ込んだ話しもあってよろしいのではないのでしょうか。生徒の教科外教育や自主活動（部活動を含む）について取り扱ってほしい。

☒ 目の前の子どもたち、全員違う種類の人間だと考え直してみると、また、違った生活ができるゾと思いました。考えてみます。

表紙カット 三谷敬一(川崎市立中野島中学校教諭)

第八回教文研教育シンポジウム記録

**外国人の子どもたちとともに**

—国際化と学校教育のあり方をめぐって—

1996年3月31日

発行：神奈川県教育文化研究所  
横浜市中区日本大通60  
朝日生命ビル2F  
☎ 045-671-5531

印刷：(有)神奈川教育企画  
☎ 045-651-1148

KYOBUNKEN